

山と茶

佐藤 力(昭40年卒)

この度針葉樹会に入会させていただきました。佐藤力です。

出身は山形県酒田市、校歌には必ず鳥海山、最上川、日本海が登場する土地柄です。昭和三十六年入部、同期には小島和人氏他六名が居ります。名前は「ちから」ですが、専ら「りき」と呼ばれていました。四十六年も経つと入部の動機もはっきり思い出せませんが、小学六年生のときに担任の先生と鳥海登山を経

験したことが伏線となっていることは確かです。若い気鋭の先生で一年間だけの担任だったのに今だにクラス会が開かれるほど強烈な求心力を発揮された方でした。その後も特に高校時代は二ノ瀧口登山道の途中にある二の瀧まではちよくちよく登ったものでした。

新入部員歓迎コンパでは例によって先輩諸氏の歓待責めに気がつけば部室で朝を迎えていました(後に自分の仮住まいになろうとは神ならぬ身の知る由もない)。部室にこもるザイルの匂い、屋台のおでん屋を呼んでの月見の宴など懐かしい思い出です。

二年余りは部活動にフルに参加していましたが、山行の思い出は数え切れませんが、それはいずれ折あらばということにして、ある日のこと、かなり遅れて入部していた三森君に誘われて一橋祭に茶道部の稽古場を訪れたことがありました。お菓子に釣られて一服喫しただけの筈が、そこで初老の婦人(師匠)と出合ったのが運命の分かれ目、師匠の個性と茶の魅力にぐんぐん惹きつけられることになったのでした。

後から考えると実は山と茶には多くの共通点があることを漠然と感じていたような気がします。山は文字通り自然が相手、茶は敢えて市中に山居を造って行われます。単独行もあるとはいえ、山行ではリーダーシップが重

要でありメンバーの協力、団結が欠かせません。茶の一会が成り立つか立たぬかは、亭主と客の応答に掛かっています。本来茶会は主客の真剣勝負の場なのです。山ではテントを含めて装備が重要ですが、茶でも茶室、庭、装束、道具が重要です。又、山では当然自炊となりますが、正式の茶会では料理(懐石)がつき物です。山では体力を保つ為、茶では客をもてなす為の食事ということになります。こうして見てくると、山と茶には衣、食、住に亘って共通点が多く存在することに気づくのです。

三年目からは師匠の内弟子的存在となって山から茶にウエイトが移ってしまいました。無数の人がAと言う人物に会っていたのに、Bにとつては運命的な出会いとなっていたという、微妙な、しかし決定的な心の働きが面白いと思います。今後とも宜しく願います。